

「ハイブリッド人文学」の愉しみ ドイツ語ドイツ文学／人文知共創センター

本を読んで「なるほど、そういうことか！」と得心したことはありますか？ 私はもう何年も前に、そういう経験をしました。そんな風に人間の情動を捉えるならば、現在自分が置かれている状況がすべて説明できる、と。情動はいかにして人間を動かすのか、人間はどのように振る舞う自分をどのように理解するのか。その本は認知神経科学者のアントニオ・ダマシオの出世作『デカルトの誤り』でした。

それ以来、フロイトの精神分析理論は私にとって新たなリアリティを持つようになりました。現在の認知科学が明らかにした人間の心的モデルから見ても、百年以上前のフロイトの理論はなお堪えうるということに、深く感銘を覚えました。現代のような脳科学技術のない時代に、それほど射程の広い洞察へとフロイトを導いたのは、患者たちが話すさまざまなエピソード（物語）でした。

人間の「こころ」をどう理解するかは、時代や地域、文化によっても大きく異なります。文学は、そうした人間の「こころ」の表現のドキュメントとも言えます。私たちが現実世界の中で経験できるものは、時間的にも空間的にも著しく制限されていますが、文学は時空を超えた経験を可能にしてくれます。その役割は、いまではヴァーチャルリアリティの技術により、文学に特権的なものではなくなりました。しかし、元々文学は紙媒体の中にのみ閉じ込められているようなものではなく、いま、さらにさまざまな媒体へと解き放たれたのだといえるでしょう。そうしたことをも視野に入れて、人文学研究科附属人文知共創センターは「ハイブリット人文学」を推進していきます。

(<https://a3hsn.org>)。

中村靖子 教授

ロンドンに亡命したフロイトが住んでいた家は、今はフロイト博物館となっている。



「地理」を学ぶということ 地理学

皆さんは「地理」に対してどのようなイメージをお持ちでしょうか。2022年度から高等学校にて誰しもが「地理」を学ぶことになり、「地理」と接する機会も増えたことと思います。「地理総合」では「持続可能な社会づくりへの貢献」をテーマに地球規模の問題や地域社会の課題を主体的に考察する機会が増え、大学で学ぶ「地理学」や実学により近くなりました。

「地理学」は、現代社会の様々な現象を、環境や場所、空間など様々なスケールから総合的に捉える学問です。地理学では、自然現象のみならず、人間の営みの全てを扱うことができ、その対象に対して様々なアプローチ（人文科学・自然科学・社会科学）が可能です。地理学では、実践的な学びとしてフィールドワークを行います。実際に現地足運び、自身が設定したテーマに基づいた調査（聞き取りやアンケート、景観観察や施設見学など）を行うことで、研究を進めていきます。

名古屋大学地理学教室では、学部2・3年次の夏に4泊5日のフィールドワークを行います（対象地域：2021年度「大垣」、2022年度「八戸」）。テーマの選定から現地での調査、発表、論文執筆までを全て一人で行わなければなりません。試行錯誤しながら自分の頭で考え抜く」という経験は地理学専攻だからこそ得られるものだと思います。また、そうして得られた「多角的に検討し論理的に遂行する力」は今後の人生においても自身の武器となるに違いありません。

「地理」を学ぶことにより、物事を考える際の「視点」が広がります。「フィールドワークをしてみたい」「自分の目で見て、聞いて、感じて学びたい」という好奇心旺盛な方は、ぜひ地理学教室の門を叩いてみてください！

平井翔也 学士課程4年

八戸せんべい汁
ご当地の食べ物はフィールドワークの楽しみの1つです。



問題解決を急がないということ 哲学

「道德ってなんだろう。」みなさんも一度は考えたことがあるのではないのでしょうか。お年寄りに席を譲るのでしょうか、約束を守るのでしょうか。哲学はこのような疑問への「考え方」を提示してくれます。日常生活で生まれたモヤモヤとした感覚を議論する、つまり、問題解決を急ぐのではなくどこまでも妥協せずに思案することこそが、哲学研究室でできることのひとつです。最近ではSNSを見ていても、簡潔にまとめられた絶対的な答えを求めている人が少なくないように思われます。そのような中で哲学は、絶対的な一つの答えが出ないことへの抵抗感を無くし、自分のペースで考えることを思い出させてくれる数少ない場所だと私は感じています。

授業には講義形式と演習形式がありますが、そのどちらでも自由に発言・質問する機会があります。たとえば、昨年は応用倫理学の分野の中での自分の興味や意見を発表するという演習がありました。私は認知症による記憶障害がその人のアイデンティティ、つまりその人がその人であるという根拠を揺るがすのではないかとといったテーマで発表しました。うまく結論づけることができなかった発表にもかかわらず、演習に参加した人たちは温かく傾聴してくださり、いくつかご意見もいただきました。

哲学へのかかわり方は三者三様です。同じ議論をしても注目し深堀りしていく点は人によって大きく異なりますが、そのどの方向にも同じように疑問を持った先人（哲学者）たちがいて、私たちに納得できる解釈を提示してくれたり、ときにはかえって疑問を増やしてくれたりします。現在、幸運なことに名古屋大学の哲学研究室には専門分野の異なる3名の先生方がいらっしゃいます。みなさんも興味関心の赴くまま哲学の世界を彷徨ってみませんか。

渡辺朋花 学士課程3年

哲学研究室の本棚
何百冊もの本の中からあなたに合う「考え方」が見つかるかもしれません。



月刊名大文学部 第134号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のもので、
2023年7月10日発行